

針葉樹會報

通卷第七十九號

西日本針葉樹會別府大會の記

シヨンチャマ

一、船路の巻

「南西の風曇雨模様」なる芳しからぬ豫報ありて、闇夜まわりに燈下管制下なる大阪天保山の海上は、墨を流した眞暗闇。こゝ別府航路にしき丸の窓締切つた三等船室は、老若男女の人いさいで汗ばむ程の蒸暑さ。出帆前の混雑を尻目に、毛布の上に車座にどつかさ坐り物賣りより買求めたるオコシ頬張り茶等飲む、五人の容目よき男子ありけり。これぞ、續く休を九州別府の針葉樹會大會に、海路繰り出す阪神勢の精銳なり。先づ別府に行つたらコンチャンに是非共手相を見て貰ふんだと楽しみにする三角親分に、雨が降つても平チャラだと張り切つてゐるホースケラツバ。續くは入江さん、オット違つた森さんに、ゴンチャン、シヨンチャマのややつこしい變名トリオ。何れも最愛の妻子に因果を含めての悲壯なる門途と見しは僻目か。五人ながら人品卑しからず、尋常の三等船客と見えざるは、たまには三等に乗り下情に通ぜんと奥床しき心構へさ覺えたり。さるにても此度の壯舉に加はる筈なりし新進氣鋭の全部助○君が、間際となつて東京へ逐電せしは遺憾千萬、いづれ査問を行つて、返答次第によつては送別會をも開かぬぞと決議せるこそ凄じけれ。

到頭豫報違はず降り出した雨中に響く出船のドラ、やをら鞆の底より浴衣一着さり出せるは森さんで、一同の僻むのもさる事ながら、いやは知らない間に入つてゐたんだとささてもく。げに持つべきは何さかである。此の時傍なる商人体のオツさんが將棋を吾れに挑みけるを、斷るも面目なし旅の徒然なるまゝに、駒を並べたのが運の盡き。連敗の悲運に陥り、角落のゲリラ戦でと頑張れど、遂に敵はす投出してしまった。今度は松木さんの觀戰武官にて森さんゴンチャンと筑碁

を圍み夜の更くも知らず將棋の仇をうつて聊かいゝ氣になつた迄はよかつたが。頭がボーッとなつて氣がつけば時既に午前様と相成つて、四邊は鼾聲雷の如く、さて何か飲むものがないかさうろくすれど、喫茶室も賣店も閉つて施す術もなく、仕方なく毛布を被り夜汽車よりは未だましなりと何時か夢路を辿りけり。

明くれば廿四日朝まだき船は新居濱に入港。港の兩側大工場軒を連れ、煙突林立天を摩して五色の煙を吐き出すは、今を時めく住友さんの殷賑さを物語る。天も我等の壯途を嘉し給へるか、明け行く空には金色の雲飛び鷗舞ふ日本晴となりました。實に兩男を交へぬ有難さである。朝飯後廣言に似ずホースケが ترامプでコバツクをやりホロ糞に負けたは愉快なりしも、人を呪はば何さやら又例のオッサンが將棋をやらうと來なすつた。斷るさ「どうせ時間潰しです」と濟まして言ふので慌て、甲板へ逃げ出した。

船は今治出で、來島の峽を抜けて兩側に、移り行く鳥影や緑の林白き渚、紺碧溶かせる海づらを快走する眞帆白帆、鏡の如き内海も秋風すれば波立つか、岬の白き燈台や眞黒な岩礁に散る白き白き波頭、こんな島にも人住むか、綺麗に耕せる田畑や平和さうな家の影、瀬戸内海のプロバーは夢の間に過ぎたるも、右に左に應接の違なき繪の如き眺めである。此の時さばかりゴンチャンのクロームライカ、森氏のスーパーシックス、一段落ちてホースケのウキルタ機等の活躍物凄し。こゝに哀れを止めしはシヨンチャマの苔むさん許りのプロニー、物蔭かくれこそくと撮るさははてさて情けなき次第なり。一等船室を徘徊したり、御茶を飲んだり碁を打つて、時間潰しと思へ共、勝つ許りにて面白からず。

晝近く長濱沖で下船する、舢舨の中に例のオッサンの姿を認め、ホツと人知れず胸を撫で下ろした次第である。長濱出れば四國もいつか小さな島影となり遠ざかり、汗ばむ程の日和にて、潮風晒す玉の肌、日光浴としやれにけり。波の飛沫やデイセルの響は彼女の心音にも似て、弾む駄辯の揚句の果ては、巾跳、三段跳やら掌押し、逆立等に打興じ、割れん許りの賑かさに、晝飯を忘れて催促される程、實に愉快なるひとときなりき。

飯食つて一睡すれば最早二時。右に國東半島が帶さながらに連れば、左手遙か佐賀關の大煙突が望まれて、泉都の屋並や今日越ゆる、鶴見、由布岳霞みたり。小手を翳せば棧橋に、珍らしやトンちゃん、荒次郎此の日の紛装は、半ズボンにストッキングの颯爽さ、遠い船路も恙なく愛國行進曲等奏しつゝ、めでたく別府に着きにけり。

二、由布の巻

上陸第一歩はさるフルーツバーラーで、ビール一杯ひつかけて是から先は九州の名幹事アラ氏お手盛のプランに従ひ、先づ今宵の宿は八里の山路越えてのドライヴ代大枚六圓也も、一台に七人詰れば安いもの。自肅自戒の秋なれば、別府情緒も割愛し、鬼こそ住まぬ手相觀る、狐狸の類の寄るさいふ、由布院温泉指して落ちのびる、七卿の心のうちぞ哀れなる。

市街抜ければ鶴見岳の裾を縫ひ行き、飽く迄も秋氣は澄んで枯芒、尾花が行手を遮ざるのみ。北九州も馬は皆戦地に在るか代用品の牛共が、色さりくの着飾れる品評會(?)の戻り道。南國のパナ、頬張り眼の下に別府の海を見下ろして、行手に擴がる城

島台、鐘紡の綿羊場の赤屋根や和蘭風の風車見え、記念撮影もそこ／＼に、右手に高く盛上る由布の偉容を眺めつゝ、城島原^{キシマバル}をばひた走り、峠越ゆれば秋の日は早や西になり百八十度のカーヴしつゝ、ゆるり／＼と由布盆地山のいでゆは湯之坪なる住之江旅館に着きにけり。

吾等の部屋は三階の急な梯子のどんづまり、由布岳の全容を窓一杯に打見やる眺望丈けは豪華版。浴衣に着かへ土曜日の午後をサボつて馳けつける、コンチャン迎へに久大線北由布驛まで散歩する。コンチャン痩せてスマートになつた様だ。長途の疲れもいさ熱き温泉に入り、胃腸に効くてふお湯飲んで、甦へりたる有難さ。待人小林遂に來らず。

扱て其の夜の懇親會の經緯^{イキサツ}は、針葉樹會に相應しき三千尺の高原に、兄弟の如き八名が飲む程に食ふ程にそして酔ふ程に、本部關西に移轉せよなんて怪氣焰現はれて、話した事は忘れたがどうせ碌な事はない、東京邊りにクシヤミされし人もあつたであらう贅を盡せる御馳走に、名物の鯉こく二杯平げし頼もしき御仁二三あれど、特に名を秘す次第なり。終つて當夜の呼物はアラ氏スロモの大手合。劈頭より殺氣漲り衆目環視、盤上火を吐く熱戦なりしも、旅の疲れか酒の酔か、將序盤より投げろ／＼と催促するアラ心臓強いわれえ、遠征軍は敗れけり。さるにても口惜しきはコンチャンに手相を見て貰ふのを忘れてしまつた事である。

明くれば廿五日も昨日に勝る秋晴にて、別府へ下る九時半のバスを待つてゐる所へ、息せき切つて馳けつくるは待人吉屋司郎なり。鑛山勤めの悲しさよ、休みもなくて昨夜半別府に泊りし由な

れど、宿の名前は言はざりき。夜道の元氣は無かつたさ見える。さらば仙郷由布院よ、高原の蜂蜜^{ミツバチ}しこたま買込んで乗込んだバスは立往生をしてしまひ、詭へ向きと荷物置きアラ／＼歩む高原の、氣分は八ヶ岳、佐久のそれに似て、由布は燧^{ヒウチ}に生き寫し、身は九州の一角にあるを覺えず。鐘紡の綿羊場をひやかせばアングラ兎許りにて、綿羊見えすはて面妖なと思ひける程に、メイ／＼と鳴く聲を慕ひて行けば、高原由布を背に負ひて綿羊草を喰み居たり。やうやくヒントを合せて「アレ彼處にペンチャンがある。」と言ひしは誰ぞ名を名乗れ。牧夫の後より肅々と聲なく牧舎へ歸るその様は、歌の文句にある通り。こんな所で遊んでゐたらいかに強度の神経衰弱も二三日で癒りさうだ。再び車中の人となり、ボカ／＼と暖い湯の街指して下りけり。

三、地獄極樂の巻

別府温泉山の手の九州の寶塚、鶴見園少女歌劇の別室でビールを飲んで飯食つて、碁を圍むあり、コンチャンに従いてグル／＼短時間餘さず使ふ有難さ。三時頃より一行九名は、泉都の此處かしこ地表を割つて迸り出る熱湯や、熱氣噴き上げ熱泥をブツ／＼沸らし、轟々地獄の聲も聞こえて、其の名も八幡、紺屋、血の池や、かまど、坊主に海地獄、延長四里の郊外を巡れるバスを借切つて、鼻にかゝれるバスガールの名調子、滿洲事變や支那事變迄織込んで聞いて極樂見て地獄、面白おかしき地獄めぐりでございます。

碧々湯を湛へた海地獄。熱湯で一二分温めた半熟玉子やうで玉子三つも四つも頬張つて、その上湯の花饅頭を三つ四つもつめ

こんで平氣なのは何故だらう。これは地獄の泥のエキスをば焼いて粉にして乾かした慢性胃病に効くといふ、地獄々々で飲み廻るお茶の効目か面白し。赤い口した姐ちゃん「此の樂を買はない時は此處は地獄の一丁目、次は二丁目で御座います。」としやべり立てる。地獄のお湯で鰐ワニを入れたる池畔にて、ハンドバックや財布等いくつ取れるか見てゐると、お久振りといひけるは地獄に佛の聲ならで、その昔國立消費組合の草加嬢。よくも吾等を忘れざる、プリント倒せし爲に非るか互に顔を見合はせば、そは然に非ず、彼女の視線はアラ氏を見上げ此の方を覺えてゐるさ言ひたげなり。地獄めぐりの歸途これから極樂見せますさ、言ひし男は共謀グルにして十錢さられ入りたる鐘乳洞はインチキの、餘人は知らずコンチャン迄まんまさかゝりしおかしさよ。地駄太踏めば天井につかへる闇の奥に阿彌陀如來を拜ませて、極樂なりとはおそろしき所かな。かくてバスは美しき海岸走り、鼻聲で別府小唄を聞かせつゝ、地獄ゲルめぐりも終りまアす。

これより火を吐く阿蘇山へ行かんぞ張切る大阪の若手四人は、これから砂湯に入るといふ皆さんと別府驛頭バカーンカールを交はしつゝ、熊本指して別れけり。(以上)

關西・中國・九州合同針葉樹會之記

A R A

東京から近藤大人御下りに依り、關西九州合同針葉樹會開催が企てられ、初秋九月の連休を期して九州は別府に於て、針葉樹會創立以來空前の大會が賑々しく開催せられたるそもぐの成行は

直方炭礦氏より既に大牟田伺候記中に發表の筈故、私の受持は關西勢別府到着から始まる。

擴聲器が何か雄壯な曲を奏で出して待合室の戸が開けられ、出迎の人々がどやぐと岸壁へ出て行く。商船會社の錦丸が、もう岸壁眞近に到着の姿勢になつてゐる。眼の悪い私がきよろしくしてゐると、「おい、こゝだぐ」と傍若無人の聲が船尾の甲板から飛んで来る。駈け寄つて見るさ居るく、松木御大將を中心にドル、權、正チャマ、何も云はない先から「靴忘れちやつた」とホー助の五人、何れも九州御下りさあつて自らはスマートを誇る出立ちで立並んで居る。「トンちゃんも居るじやないか」と松木さんに注意されて、振返つて見るさ先日山から歸りに丁度廣島へ轉任を大阪驛で見送つた五十嵐さんが、ニコくして待合所の方からやつて来る。此れで關西、中國、九州合同さなつた譯だ。今朝同じ汽車でありながら、門司さ小倉から乗つたばかりに氣が附かず、私は宇佐で降りて八幡宮へ寄道して來たし、今迄會へなかつたのだつた。

水の上を長い間走つて來ながら喉が乾いたと早速催促があつて豫定のバスをハイヤーに變更、流川の喫茶店でビールの乾杯、安着を祝福する。

正チャマはスローモで有名であつたが、流石に大阪で鍛へられてゐる丈あつて、自動車に乗り込む迄の短い間に「九州のパナナは甘いね」さかなんとか言つて、一包み持込んだのは甚だ要領が良かった。バナナを食ひながら、右に左に別府灣を見下ろして由布の高原を登つて行く。小さい割に大きな風格を持つ眺めに良い

な／＼の連發、私は先づすつかり安心してしまつた。と言ふのは近チャンでも居れば外に手もあらうが、私一人で、はる／＼大阪くんだりから來た連中に「何でえ」なんて痰阿を切られたら、コース選定の役を受持つた九州勢の中たつた一人出迎に出たんだから、どうしたら良からうと初めから内心心配して居たのだつた。それで直方炭礦氏と一緒に連れて來よう、速達で早くすらかれと唆して置いたんだが、近チャン同様炭礦屋さんの悲しさ、折角の旗日も休まれず、果して今日中に目的の由布院温泉に着けるかどうかとも分らない仕末なのである。明日見學の豫定地鐘紡の牧場も過ぎ、谷川岳耳二つに似た由布岳の山裾をぐる／＼廻つて下りにかゝる、温泉場が目の下に見えて來る。近チャンの乗つて來る汽車迄に二三分あると言ふので、浴衣に寬いだが出迎に遅れては一大事になると言ふので、風呂へも入らず今度は全部で田圃道を驛へ歩いて行く、丁度汽車が着いた所で、愛用のカメラを肩にかけ小脇に風呂敷を抱えて、一寸こわい顔で——お迎が一寸遅れた爲らしい——近チャン一人で現れて來た。遠來の關西勢から「やあ／＼」と挨拶でこわい顔も直ぐ何時もの近チャンに歸り一段と賑やかに元の道を宿へ引返す。松木さん、五十嵐さんと並んで行く近チャンの小脇の風呂敷包は何だらうと問題になつたがスローモは菓子だと言張つてさう／＼うどん屋の前を通り越して一人歸つてしまつた。残つた四人は、それ程近チャンの心懸が良いと思はなかつたので——失禮な申分だが——うどんかキシメンか確かめる爲めに（別に食べたかつた譯ではない）寄道して遅れて歸つて見るとちやんとテーブルの上に菓子が開けてある。

夕食に鯉が出るさびたりと豫言的中したり、奥さんを持つと嗅覺迄發達するものと見える。全く驚くの外はない。

一通り菓子を食ひ荒すき揃つて風呂に入り、酒屋の鷹の湯式に湯槽の周圍をめぐつて會談となる。どんな話だつたか一々思ひ出せないが色々全く氣持のよい、しゃべる方も聞く方も愉快な話だつた。唯、いゝ加減にしやべり疲れた頃、こんな不穩な言葉を發したのを覚えてゐるが誰だつたらうか知ら。

「○○さんが居ないさい、れ平等にしやべれるから」と。○○とか××とかは當節風で全く便利な文字？だが、今之を明にする事は不可能ではないが、針葉樹會の目と耳をなくする恐があるから遠慮させて貰ふ事にする。唯、讀者の皆様にかくも不穩の言辭が飛び出す迄に此の風呂會談が賑かだつた事を、判つてもらへば良いのである。

風呂が済むと昨夜の船の中から持越しと言ふコ——碁ではないコである——が岡田、森——小橋、十合の間で始まる。昨夜はコの爲めに不眠だつたと言ふからうれしくなる。

小林の不參が確定的になり、最もはりきつてゐた筈の二名——小林と助さんの酒合戦一騎打も見られず多少淋しいが、九州の大看板を加へて八名いよ／＼夕飯となる、程よく飲み食ひ且談し明日を楽しみに寢に着いたのは十一時過ぎであつた。

明くれば前日にも増した上天氣。ホー助は五時に起きて由布岳に登るんだと力んでゐたが、果して登つたかどうか一番寢坊した私は知らない。漸く追付いた小林を加へて一行九名、昨日の道を引返して鐘紡の牧場へ向ふ。ガソリン統制の餘波か、途中でバス

がエンコしなりましたのでぶらぶら歩きながら牧場へ着き、飼育のアンゴラ兎とペンちゃんによく似たのが居る綿羊——メイ——と鳴きます——を見て、エンコのお蔭で待つて呉れた元のバスで別府へ出た。普通の所では面白くないと言ふので、九州の寶塚、九州一の少女歌劇——一番よいと言ふ意味でなく九州唯一と言ふ意味——を持つ鶴見園に入る。鬼に玉をぶつつけて日頃の鬱憤を晴したり、松木さんが少尉の腕前一〇〇%發揮して射撃に凄い所を見せたり、昔なつかしいピンポン、さてはふらふらのローラースケートまでやり昔さ一寸も變らぬ愉快さ振りである、扱大詰は地獄廻りである。サービスの良いバスは廿人以上も乗れる大型に、我々の外一人十名を乗せて所謂説明付で地獄見物に出發する。地獄の一丁目二丁目を通つたり、二〇〇匹以上も居る鰐ワニの飼育場を見たり、海地獄で誰やら得意の玉子を食べたり、實に有効に時間を過して、午後五時半阿蘇へ行く森、岡田、中島、黒田を別府驛に送つて、會は愉快そのものの中に終りをつけた。

余り時間を有効に使ひ過ぎて多少あわただしい所もあつた位で爲めに報告すべき珍談奇談も現れずお開きとなつたのは、目出度いやら物足りないやら、矢張り役者が一寸足りなかつたのかも知れません。

阿蘇行は何れ一行の中から報告がある事でしょう。

昭和十三年九月二十四日、二十五日

於由布院温泉 住の江旅館

(参加者) 五十嵐 松木 森 岡田 中島 黒田

近藤 堀岡 小林 (以上九名)

(追記) 關西の高木、太田、宇佐美の諸氏、小谷部、森脇、和田等の若手連中の不参加は非常に残念だつた。特に小谷部が必ず行くと言つて居ながら止むを得ないとは言ひながら、無斷で缺席したのは懲罰に値ひするものと認め、近く懲罰に附せられる筈用心すべし。

以上

關西九州合同懇親會

中 島

一度やろうと前から話があつたこの合同大會は、八月中旬堀岡が山行きの途次大阪へ寄つたので具體的に決定、遂に九月二日續の好機會に開催された。五十嵐氏は廣島より陸路、大阪側は天保山(山にあらず港なり)より船で出發、翌午後二時三〇分別府集合直ちに別府高原を経て由布院温泉へ。こゝで残念乍ら小林遅く着いた爲にこゝまでこられず一人で別府にしまつていゝことをしたらしい。

翌日早朝再び別府高原に戻り鐘紡綿羊牧場見學、鶴見園にて晝食、午後三時地獄廻りのバスに乗る。午後五時地獄廻りを終り、別府驛にて阿蘇山組だけ五時十五分の汽車に乗り解散。

九州有數の名峰由布岳麓の由布院温泉と云ひ、銀色の芒に輝く別府高原又は綿羊牧場の美しさと云ひ、山の集ひには絶好な場所でした。

宇佐美氏、太田氏は御店の都合により、小谷部氏は家の都合上出席出来なかつたのは甚だ残念でした。來年は京都邊りで東西大合同でやりませう。

阿蘇行き

中島

ジャンボントム船は出て行く煙は残る、と云ひたいが船はにしき丸でディーゼル、海上防空訓練で真暗、九月二三日夜船旅には絶好のシーズンである。船中の話は黒田氏に委せ大阪側一行松木氏を始め森、岡田、黒田のうるさ型と僕は翌日午後別府着。棧橋に堀岡が半ズボンにマドロス銜えての出迎。恐れをなした。

直ぐ由布院温泉へ、翌日別府で地獄廻り後、夕方阿蘇組と歸宅組に分れ解散。解散と云つても實は阿蘇組が別府に泊るさよくないと云ふので体よく追ひまくられた形だ。雨降り男がこんなに多勢居るのに二日とも天氣に恵まれるなんてよく、悪運が強かつたらしい。さぞ森さんのポーターブルアンブレラーが泣いたことだらう。

さて由布院別府は九州側が筆をそろえて悪口を書くことでせうからお委せして阿蘇行きの森、岡田、黒田と僕の一行は北九州を横断する豊肥線に乗つて車外の風景の美しさにポヤンとしてゐる間に内牧へ着いた。慌て、降りて内牧温泉へ真暗の中を自動車で飛ばす。

この温泉は阿蘇とその外輪山との谷にある静かな温泉である。温泉第一の阿蘇ホテルに宿泊。宿の番頭が出て来て一体誰に聞いてこの温泉へ来たのかと云ふので近チャンの名を書いて来たから多分御禮狀が行つたことでせう（近チャンよ、本當に行きましたか）。

温泉は無色透明、早速飛び込んでいゝ氣持になるさ岡田、黒田

の兩先生最近覺えたてのうたひを唸りだした。幸ひにして他に客がなかつたからいゝ様なものゝ孫サンや近チャンが居たらどうだらう。併しまあお互に一人身ではありませんから余り悪口は書かんとこにしよう。温泉から出るさ又ザル碁が始まる。碁と云へば別府でも由布院でも一寸の暇さへあればお互に天狗の化けの皮を剥き合つてゐるのだからどうかと思ふ。併し近チャンの云ふ通り天狗でなくては出来ぬことだ。

翌朝内牧より坊中迄ドライブ、坊中驛前の茶屋で遊覽バスを待つ。この間にこゝの茶屋の怪しげなこまつちやくれた女に惑はされて凡そ不美味い腐つた様な土産を買はされた。

「大阪の男はよかバツテン〇〇たい」さきた。この〇〇の所どうしてもわからない。

卅分程して例のバスに乗る。世界的に有名だと云ふ驚ガールの案内よろしく典型的な外輪山と九州アルプスの久住山等を眺めながら午前十時頂上着。武運長久祈願に集つた國婦團と小學生團で相當な人出だ。噴火口の毒ガスにやられてゴンチャン脊中迄痛くなつたそう。一時間見物後又バスで下る。同じ道を下るからもう案内なしかと思つたら小唄迄に入れてやつてくれる。眼下は一面に緑の芝生を敷いた様な軟かい丘の連續で一日中晝寢でもしたらどんなにいゝ氣持だつたらう。

十一時五十分坊中着、又々さつきの女現れ出てベラベラバツテンをやらせ煙に巻かれて急ぎ熊本行きに乗る。所が森さんと黒田さんがこの坊中でポーツトして帽子を忘れたものだ、ボーかと思ふよ全く。ゴンチャンは感心にチャンと持つて来た。流石に第三

世迄作れば賞祿がある。折角博多で夕食でもと楽しみにしてゐたのに熊本でこの帽子受取の爲三時間を過すことゝなつた。併しこの間に熊本見物一通出来た。水前寺公園、熊本城の一部宇土櫓、加藤清正の蛇目の兜、それに手形の大きなのにびつくりして最後に〇〇町(町名は都合によりハッキリ書くことが出来ません、差支へがあるそうです)見物、午後五時一五分急行で門司へ。門司で堀岡が迎へに来てくれた。しばし別れを惜しみ十時發にて歸阪。

木曾駒連峯を縦走せざるの記(其の三)

S

空木行

八月二十日 晴

キラキラと光る星を屋根の隙間から眺め乍ら知らぬ間に眠つたらしく、夜中に寒くて時々起きたけれど邊りが白んで来てふさ目を覺すさ、もうペンちゃんが起き出して火を起し獨りでいれむりをしてる。やがて味噌汁の香を一杯に漂はせて朝飯だ。日蔭なので陽は射さないが空は澄み切つて氣持がいい。昨夜は敵共三人何處で夜露を凌いだ事だらうと話し合ひ乍ら仕度をする。

出發七時。形許りでも一夜を明したこの小さな北澤小屋に別れを惜み、今日中に宮田小屋迄行くにはちと緩りし過ぎたと思ひ乍ら短い笹の多いザガザガを登る。邊りは何處迄も静かで十分位の間隔を置いて鳴く駒鳥の聲が澤を渡つて聞えて来る。急な登り許りの道なので段々見晴しが良くなり、五〇分にして近くに御岳を

眺めつゝマングリンを開け喝を沾す。笹が次第に無くなつて林に變り二、三七一米獨標近き頃で第一回晝食。それから幾分緩かな道を北側に捲いて逆に南側に出ると眼前に南駒、空木の雄大な姿が現れる。勇躍して尾根の南面から稍々捲く様に登り、林からすつかりぬけてがらりとした道に出るさ水場だ。時に十一時十分。尾根から幾何も無いのに水量は案外多い。遙か右下の方に東川本谷が白く光つてる。これから先は水が無いので水筒に一杯つめる。皇帝の大きな御水筒は相當重くなつた事だらうと眺めてたのはペンちゃん、水筒を持つて来ないなんて怪しからん。

水場から十分程で木曾殿越に着く。標高二、五八〇米位のこの鞍部は密生した這松に圍れ、明い花崗岩砂を敷きつめた一小天地だ。東川本谷の方からは爽かな風がサツと吹き上げ、反對側の方は遙かの彼方、伊那の平野の真中に天龍の流水が銀色にくれつてゐる。其の昔木曾義仲が此處を越えたのでこの名がついたのだらうけれど、大田切の方は物凄い傾斜で一才降りる氣はしない。昔の人は相當なものだつたらしい。朝の中良かった天氣が段々雲を増し尾根に出た爲か風が強くなる。

本谷山への登りは急な上に這松の幹が邪魔になつて仕方がない。一時頃第二回晝食。本岳の方は雲で全々見えす宮田小屋へはどうしても十時頃になるし、尾根近くでビヴァークするのは嫌だし引返さうかなんて云ひ乍らも前進する。然し恰度木曾殿とハシゴダルの中間邊りで、それは遙か遠くの方に本岳の姿が雲の切れ目から見えた時、集議一決今來た道を引返す事にする。今宵は空木小屋宿りと決れば氣は樂でパイ罐を平げ暫し足を休めてからも

りもり降る。あはよくば明日こちらに来るであらう敵共三人へ書き置きをして。

さつきの木曾殿越迄降つたのが二時半。時々襲つて来る霧の中を岩燕が羽音鋭く飛んでゐる。眞黒な岳鳥が一羽大きな岩の角に突立つて無氣味に鳴く。

空木の登りも余り樂ぢやないけれど這松は無く奇岩怪岩の亂立を仰ぎ乍ら登つて行くので、氣分はすつと明くビツチも上る。第一の隆起が四時。聳立する岩塔の右を捲いてしつかりした岩の間を小さな上下を繰り返して第二の隆起は左を捲く。三、四回休憩してやがて廣々とした空木の頂上に立つたのはもう落陽近き五時一寸過ぎ。時間があつたら直ぐ目の前の南駒迄行きたい處。今日は雲が多く木曾谷の方は暗雲低迷して雷鳴さへ聞える。下から吹き上げる風は相當寒い。伊那側の方も入道雲がムク／＼頭を擡げてゐる。直ぐ足元から伊那側に走つてゐる小さな尾根の下に空木小屋が白く見える。撮影に手間取つて降りかけたのは六時近く。傾斜の緩かな氣持のいゝ澤を三十分も降るさ空木小屋に着く。出来た許りで木の香がする。水は小屋の下手約五十米の澤にあつてかなり豊富だし燃料は小屋に使つた木の屑がくさる程ある。先着者が一人居た。始めて會つた登山者だ。恰度下から着いたらしくひどく疲れてゐる様子。早速火を燃して晩飯を作る。餘り御馳走を持つて來過ぎた爲どうしても食べきれない。ペンちゃんのみ米二升は全々減らないのだから氣の毒。尤も始めから大して重くはなかつたけれど。相當冷るのでありつたけのものを着て眠る。

八月二十一日 晴

起きたのは四時半。昨夜も随分寒かつた。今日は又良い天氣で朝日を受けた空木は、邊りの牧場の様な和かな風影に一層美しく映えてゐる。遙か東の方には南の雄峯が逆光に黒々さ連り、實に静かで平和そのものゝ様だ。空木へ行くさ云ふ長沼氏と別れ七時十五分出發。なだらかな道から尾根に出るさ、下の方はきれいな雲海で南の左の八ツが良く見える。ハシゴダルから寶劍への稜線も手に取る様。木曾と云ふ處は鳥が餘り居ないらしい。梢を渡る小鳥の姿は餘り見かけなかつた。段々下になるさ花が澤山咲いてゐてペンちゃんも馴れぬ手付でスケッチをする。

九時中田切分岐點に着く。尾根がひどく瘦せて來て殆ど垂直に近い所もある。これを登るのだつたらいゝ加減へばる事だらう。風が通らないので仲々熱い。第一回の晝食をして十時半マセナギを通る。この邊になるさ雲の下になり、尙遠く下の方に赤穂の村が見える。十一時過ぎ池山小屋に着く。笹を敷きつめた廣々した處にあつて小屋にはHOTELと書いてある。テラスの様なものがあつて一寸氣が利いてゐる。ペンちゃんは此處から銀座の松屋で買つたさ云ふ草鞋に皇帝はゴム足袋に履きかへる。感じが悪いつたらない。茲からは尾根徑もあるが澤を降る。途中二つ三つ炭焼小屋を過ぎボツカリ廣い路に出るさ、もう人里の臭が濃厚となり子供のわめき聲など聞える。やがて一時半光前寺の境内に入る。立派な參道と廣い境内を持ち曹洞宗の名刹と聞くが成程大きなお寺だ。折からの日曜日に村から一寸離れた此處へ家族連れで澤山遊びに來てた。皇帝の云はれる通り赤穂の女性は美しい。デリヂりさ照りつける陽を例のペンちゃんの女用洋傘で代りばんこに防

ぐ。扇子を襟にさしリユツクに靴をつけ草鞋で歩くペンちゃんのを姿を撮らうと思つたがフィルムが無かつたのは實に残念だつた。赤穂の驛に着いたのは三時五分前で辰野行が發車しかゝつてゐた。ベルグハイル。(完)

保養日記

日江井正己

永い病院生活から解放されたのが五月廿五日、入學以來行つた事のない學部へ顔を出したりしてゐる中七月になつてしまひ、涸澤へ行く岳友を送り出して氣の抜けた様な心をいだいて上州四萬へ來た。温泉生活など凡そ山へ行けた時には輕蔑してゐたのであるが、久方ぶりに見る山の緑は僕の心に十分の休養を與へてくれた。温泉に満ち足りて颱風禍の跡生々しき帝都へ舞ひもどつたのは九月の四日であつた。

七月二十三日(快晴) 本日四萬へ向ふ。上野八時四十分發。快晴の武藏野を一走り、熊谷邊まで來るさ、白雲の湧然たる所秩父の連山が見える。暑い。澁川着たゞちに自動車へ乗換ふ、次第に山へ近づく身を樂しみつゝ、自動車は進む。宿へ到着するとさすが涼しい、直ちに風呂に入る、清流の音が耳を打ち都會にある者の苦勞をはらつてくれる。夜主人と話をして氣がつけば早や十一時に近い、急いで風呂に入りて寝る。瀧の音が耳について仲々寝られない。

七月二十六日(雨) 終日雨ふる。目覺むれば雨。弟が起きるまで窓にもたれて雨景に見入る。細かな五月雨の如き雨が後から後からしたゝり落ちる、まるで絹糸でも天からつるした様に。風が吹

いて木々からはらゝと雪が落ちるさ赤とんぼがこの雨の中に舞ひ上る。靜かな朝だ。遠山に霧のかゝるさ見るまにそれは取れて行く、跡には雨の線のみ残つてゐる。濛々たる湯煙りの中へ起きて來た弟を連れてゆく、早朝故老人連のみ來てゐる。飯後退屈まぎれに帳場に行くと滞在客が一人來てゐる、仲々釣好きな様子がつちりした體格、それでゐて商賣をやつてゐるせいか話が上手だ。釣の話になるさ實に穿つた事をいふし、魚の習性についても面白い話をする。實は釣の話で去年の今頃歩いてゐた藥師邊の事を思ひ浮べた、藥師澤へ入つて岩魚を釣り上げられる日が何時か來るだらうと思つゝ、黒部五郎のすそ——雲の平から黒部上流の見える所を歩いてゐたのだつた。永話に夢中になつてゐたが部屋を辭して自分の部屋にかへるさまだ雨が降つてゐる、四方は暗い雨は時々強く、又止む。晴れ間をねらつて外に出て見ると雨に濡れた土の香が鼻に嬉しい。夜尙やまぬ、瀧の音に吸はれ行く雨の音もわびしい。

七月二十七日(曇時々雨) 昨日泊つた日本橋の人が今日は稻堤山を越えて越後へ出るといふ、この雨で大變であらう。それにしても我の不甲斐なさよ。唯一本の腕の爲に精神的、肉體的兩方面から支障が來ようさは神ならぬ身の知る由もない。マンメリーは山の好きな人は速かに山に歸つて來るといつたが双手を舉げて賛成したい。山の好きな連中は山へ登つて居れば良い、いらぬ口を聞くからそこに偽登山家との相剋が出来る。偽登山家連は前衛の山に登つてそれでもう大山脈に登つた様な氣持になつて新聞、雜誌に内容とばしき紀行を發表し、或ひは又つまらぬ意見を開陳せん

とする。

登山をつれに進歩發展せしめ様とする時には必ず危険犠牲の如き肉體的、精神的の内証が生ずる。この時に當りしいて危険を避けんと思ふればそこに退歩乃至停滯がやつて来る。危険（こゝでいふ）は明らかにこれのみを意味するのでもなく冒險の意をも多少含む事に注意したい。かういつた登山家の思想をもつた人で山に登らぬ人もあるが、兎も角さういつた精神の持主に對して全幅の支持と敬意を捧げたい。我々はあくまで純粹登山のため戦を交へればならぬ。我々はたゞ黙々として山に精進したい。

うつすらと寒さを覺え乍ら散歩を終へて宿に歸つてくる。霧は去りもやらず時々時雨が降る、明日も危い。一人で湯槽にひたつて目をつむればたう／＼たる瀧音に交つて前に落ちる水の音もと斷え勝ちだ。

七月二十九日（晴） 久方ぶりの快晴、しかし今朝から風邪の氣味でよくない。十分氣をつけなくてはいけない。十時頃風邪退散の爲と思つて昆虫採集をやる弟や宿の子供等と共に山へ出掛ける、山さいつても切開きの所で相當急斜面の所、こゝには色々な蝶が居る所だ。ちぎれ雲がばかり／＼と澄み切つた青空に浮んで居る。ちり／＼照りつける太陽にのびてしまひ、隣の林の中にもぐりこむ、こゝまで来るさ溪流の音も聞えない、林間を登つて見ようと思つて摩耶の瀧道をつたふ。子供等はがやがやしてゐて來ない、仕方がないので一人でぶらぶらと上る。つまりぬ時又は何も考へたくない時は子供の御相手に越したものは有るまい、子供達の他愛もない話、喧嘩等の中に我々は多分に數へられるものがある。

殊に子供を觀察すると面白い、まるで大人の様な面付をしてゐるのがある、要するに利口な奴だ末恐しいと思はせるものもある。

小鳥の囀りが喧しい位、けれど僕の心境は何さなく物足りぬ、落着がない。この林の中でふと思ひ出したのは南の山であつた、かうやつて上つたつけあのドンドコ澤を、しかし今はもうてんで荷を擔ぐ元氣もない、早く元氣になつてやらうと思つても仲々進捗しないのでくさる。山だ、青木の山でもやはり山なのだ。道が谷川を横つて二つに分れる、始めて我にかへつた、ぼんやり考へこんで皆來ない中にこんなに來てしまつた。右に折れると人があまり來ない所さ見え、路面に草が生えてゐる。僕には楽しい山道だ、十分たんのうした氣持だ。餘り楽しい山道を歩くさ刺戟が大き過ぎはしないかと恐れる。あまり氣分がすぐれない。

八月一日（豪雨） 今日も寝起きが悪い、頭のしんが痛む完全にやられたらしい、仕方がないので床をさつてもらつてゐる。いやにあつさり風邪を引くのも體が弱つたせいらしい。雨のためか心が滅入る。雨は止みさうもない、さあつと二十分位降つては小止みになり、又降りだす、トタン屋根の下では全くたへきれない。窓から外を見るさ宿の前の川は増水して赤濁の奔流となつてゐる、どんどん増水するらしい。夕方少々小止みになる、幸ひ氣分も良くなつたので下駄をつゝかけて川を見にゆく、橋を渡るにつれて土牢の中へ入る様な臭氣が鼻をうつ。正面の瀧全體が一枚の布切の如くたう／＼たる音を立てゝ落ちる、水は岩にせかれて猛烈な速度で下に流れて行く。橋の上から下を見るさ水に引き入れられる様な心地がする、兩岸の木々は猛烈なあふりを喰つて斷えず揺れ

てゐる、我々は飛沫を受けて全身濡れてしまふ、赤濁の水は盡きるとも知らない、益々増える一方だ。夜に入つて實にひどく風さへさもなつて來た。早く就寢したが雨の音、川の音もの凄く仲々寝つかれなかつた。

八月四日(曇時々雨) もう幾日續いたらう、未だ止むとも見えな
い、薄黒い空からは斷間なく、太い雨が篠つく様にふつてゐる。
子供等は相不變騒いでゐる。弟は宿の子やお客の子を連れて來て
僕に戰を挑む、仕方なく應戰するさあすごい、座布団や枕の雨
だ、やがて下のお客さんが上つて來て「いやにうるさいね」でこ
れも終つてしまふ。新聞を見るさ文部省の大學の改革案をめぐつ
て大分喧しいらしい、文部省も文部省だし大學も大學だ、今更改
まつて騒ぎ廻る必要もない。時局の波——統制流行——にのつて
大學改革を斷行せんとする文部省、それに徒らに大學の自治を飛
んでもない所に振廻す大學との試合はいづれ泥試合に終始するの
は理の當然ではないか、雨の晴間をうかがつて天然風呂に入り
行く。こゝでも弟達の襲撃に遭遇して散々の態だらう。ほう／＼の
態で逃げて歸り帳場に來ると主人につかまる、色々話をした學句
の果は又苦勞を積んだ御自分の自慢だ、月給十圓の小僧から今日
の地位を築くまでそれこそ海千年山千年の生活、すいも甘いも味
つた人故話も上手だし聞いてゐてもあきない、最後は例の如く學
生の攻撃だ。法科の學生は一番いかんさいふ、敢て商科さはいは
ぬ所が良い、くすぐつたい事おびたらしい。この主人も矢張り世
間並のおやぢであつた。夕方二十四日に歸つた母來る、久方ぶり
の母の來滿を見て弟の嬉しがる事。

八月五日(晴) 朝まだき霧深くして今日も雨かさ憂鬱になつたが
次第に青空が見えて來た、生氣甦つた感がする、これが山小舎で
あつたなら、空を打仰いでしばし物につかれた様に茫然となる所
であらう。午後スキー場の方へ出掛る、橋が流れて渡れないので
戻る。

宿の主人が讀みなさいといつて貸してくれたパンフレットをよ
む、折角讀み給へといつてくれたのを讀まずに返却するさ變な顔
されるから。實に變つた信念の人であり、健康的な人であると思
つた「學問の奥底をきはめるには熱意意義と智識慾があればよい
と思つて居たが今にして始めて心の清純さを保つ事が必要である
事を痛感した」とのべてゐるが成程とうなづける。更にこの人は
道德心の向上を強調してゐるが道德の規範内で生活する人には所
謂眞面目な人が多い、發展性がない、又誤解されるおそれが多分
にある。融通性あるものが欲しい。

夕方ピンポンに興じ乍らふさ顔をあげるさ明日も快晴だらうか
夕焼雲が眞紅に燃えて棚引いてゐる。赤トンボも一日の活動を終
つて電線に止つて動かない、その羽根を金箭がきらり／＼と射る
様は實に見事だ。もう一日も終る、ぼんやりしてゐる中に夏休み
も残り少い。(續く)

通信

○柿原謙一君より (十月十七日附 編者宛)
入隊以來既に二ヶ月にならむとしてゐます。新兵さんの生活仲

々多忙でありますが、どうやら做れて来て、氣持にもゆきりが出来て来ました。本日は單獨外出で東京日本橋の戀しき吾が家、絹問屋へ歸つたところです。

森川へ電話しましたら、何でも山へ出かけたとかで不在です。

「山へ行つた」と言ふ言葉を聞きますと全く感慨無量ですよ。代々木の練兵場で、秋の空の下に横る奥多摩や秩父の山々を眺めまですと、秋風寥々たる中に静もりかへつてゐる三ノ瀬の部落や、梓山、中津川のこさが目に浮んで来るのです。山へ行く——この言葉に胸にしめて新兵さんは、代々木の練兵場から秋の山脈を眺めます。山岳部や針葉樹會の方々の多幸なる山行を祈り乍ら。

貴兄の入隊は確定してゐますか？ お互に國家非常の折なれば、身體强健に、國家の爲に忠勇の誠を勵みませう。

それから會報を店の方へ送つて置いて下さつて誠に有難う。無理な御願乍ら會報を一部秩父へ、一部店の方（日本橋）へ御送り置き下されば有難い。外出した際に讀む事も出来ます故に。

針葉樹會の方々へも呉々も宜敷く御傳言下さい。高瀬さんから御懇なる御手紙頂きましたが、御會ひの節なりとも宜敷く御禮を申し上げて下さい。先は右迄。

○小谷部全助君より（十月十九日附 編者宛）

めつきり秋めくにつれ穂高や北岳の新雪が偲べれます。先日は會報有難う。例の如く筆不精で失敬しました。貴君隨分山へ行かれたらしいが、東京は好いですね。小生はさうさう當然ならなければ損する夏休みも取れず、定例休暇も未だ一日もさつて居ません。その内くと思ふばかりで。

アパートは止めて又兄貴の所へ越しました。では又。

山岳部報告（八月・九月・十月）

記 録

- (1) 丹澤山塊（八、一一八、一六）山田 他四名
- (2) 大雪山（八、二一八、二三）ニッ谷
- (3) 北岳行（八、三〇九、六）大塚 木島 宮城 山田
連日の猛烈な降雨の爲、野呂川の増水に災されて北岳パットレス登攀の計畫は、シレイ澤岩小屋にて中止のやむなきに至つた。野呂川の徒渉は絶對不可能で、赤メケ澤を殆ど稜線近く迄登つたのみ。尙この行では丸茂先輩に甚だ御手数を御かけしました。こゝに厚く御禮申し上げます。
- (4) 多摩川水源の旅（九、九一九、一二）久保 他一名
將監峠を目指したが、路が壊れてゐるこのことで、落合から方向を轉じて氷川に出た。
- (5) 奥又白生活（九、一九一九、二五）大塚
北尾根三峯の奥又白側を登つた。
- (6) 谷川岳マチガ澤（九、二一九、二四）山田 檜淵 小泉
一之倉を登るつもりであつたが、天候不順のため、變更してマチガ澤を登つた。
- (7) 八ヶ岳（九、二一九、二四）原 岩崎
八ヶ岳はさながら新宿のやうな賑はひ。これではとてもやり切れない。
- (8) 明神岳東稜・奥又白谷生活（一〇、一三一〇、二三）佐々木

大塚 山田(山田は十六日出發)

二人で東稜に登つてから後、三人で奥又白池に登つて幕營、北尾根五峯の壁を登る。後天候崩れて目指す一峯の壁はやれなかつた。池から下る時には吹雪であつた。

(9)大瀧山・涸澤(全右) 森川

足も大分良くなつたので佐々木等と德澤小屋迄同行し、大瀧山や涸澤に遊んだ。

(10)鹽見岳(一〇、一五—一〇、二〇) 原

始め豫科部員と行く筈であつたが一人になつた。三伏峠の下では寒い一夜を明かした。赤石の方は道がかなり崩れてゐるらしい。

(11)八ヶ岳(一〇、一六—一〇、一九) 久保 檜淵 他二名

日誌

○夏山報告會 九月十七日(土)午後六時より 於國立部室

出席者 佐々木 森川 鷺崎 原 船本 岩崎 大塚 日江井 里見 木島 宮城 高橋 山田 小泉 檜淵 二ッ谷 先輩望月氏

部室でスキ焼をしながら夏山の思ひ出に耽る。

○定期部員集會 九月三十日(金) 於國立部室 出席者四名

十月七日(金) 於國立部室 出席者四名
十月廿七日(木) 於國立部室 出席者十二名

記録

○穂高・槍・木曾御岳 増山清太郎

九月十一日(松本—上高地—涸澤—穂高小屋) 十二日(一肩ノ小屋) 十三日(一槍平—槍見温泉) 十四日(一杉尾—船津—高山) 十五日(高山の秋祭りを見物) 十六日(一久々野—秋神—岳ノ湯) 十七日(一木曾御岳—王瀧) 十八日(木曾路を逍遙、夜半歸京。)

○甲斐駒ヶ岳 増山清太郎 他

九月二十四日(韭崎—横手—七丈小屋) 二十五日(一頂上—台ヶ原—歸京)

○御座山 増山清太郎 望月達夫 岩崎利一

十月十六日(信濃川上—小川口—大門峠—三川—栗生峠—上栗生) 十七日(一唐澤—御座山—金山澤—山口—小海)

消息

小谷部全助君 大阪市東區備後町三丁目十九、洲崎方へ轉居。

柿原 謙一君 十月十九日父君を失はる。應召中の折柄殊に御同情に堪えない。謹んで哀悼の意を表します。

林 俊介君 此の度家業を繼がるゝこととなり歸京さる。

住所—東京市澁谷區北谷町四九(澁谷三六五五)

御店—二葉屋林商店(神田區淡路町二ノ七、神田一三七四)

編輯後記

私儀此度入營と決定致しましたので、最近歸京された林俊介君に編輯の仕事を引き継ぐことになりました。今後は林君宛會報の原稿御送附あらんことを御願ひ致します。又會計幹事の新羅二郎君も就任以來既に一年半餘になりますので、後任者を松浦静雄君に決定致しました。右御承知置き下さい。(望月生)